

# 紙子仕立両面鑑

## 大文字屋の段

高き屋の、御製の詞ゆるぎなく、竈賑はふ浪花津や、寄り来る人も大坂は実に日本の台所、諸色諸問屋立ち続く中に取り分け本町筋、家柄古く身上は左前でも歯牙隠す、河内木綿の長暖簾。万屋の助六が女房の里と格式も大文字屋栄三郎、男一匹柔かな綿商売の店先に、汗水垂らし仲仕共、話交じりにこてくと作る江戸荷の締め括り、片手に証書く墨の真黒になる七つ前、仕舞ひ仕事ぞ忙しなき。帳箱には手代の権八、番頭顔の鼻高々、煙管ひねくり曲り声、

権八「ア、こりやくくく、口喧しい世間話措いて貰ふ。口が動けば手が止まる、仇口ばかり仰山で根つから仕事のはかが行かぬはい。僅か七駄の荷造りに二人

違ふ。二進が三進も行き難い。早う仕舞ふてまん直しに、五一かゝの顔など見よ」

と仕事片付け掃き出して、挨拶そこく立ち帰る。

権八「エ、頤の過ぎたならず奴ら」

とぶつくと

後ろの暖簾を上げ、立ち出づる栄三が母、  
妙三「イヤノウ権八、先から音がせぬが、栄三はまだ戻らずか」

と、言ふに

権八しかつめ顔、

権八「ハイ、朝飯の箸下に置くと駆け出した旦那殿、大方、九郎右衛門町、か島の内でござりませうぞい。イヤモ、近年田舎の不景気で掛け損の仕続け、モ気もせやくはこの番頭ばかり。その上諸式は皆高値。極つた上にも極らねばなくく往けぬこつちの身代ぢやに、アノ旦那ののらくらには、この白鼠もヤモほつと困つた」

と、主の蔭口憎て口、我れは顔する面憎で、

三人が一日仕事、それではとんと勘定にかゝるもんどやない」

と、喚き散らせど

『いつもの事』と、耳にも掛けず仲仕共、

権八「ヤアこれ申し権八さん、またしてもせかく、せかくくと、なんぼその様に急がしやつてもな、手は二本外ないによつて二人前は働きませんはいな。お前さんもまた日がな一日その様に内で修羅くら煮やさずと、ちよつと神参りか、また浄瑠璃でも聞きに往かしやれませぬかい」

権八「エ、それを貴様に習はうかい。在の買ひ廻しから諸国の駆け引き、おれが胸の算盤一つで一桁違ふても内は暗闇。身上の狂言に追つ立てられて芝居ごころかい。よい仇口を叩かずに仕事仕舞ふたら、サ、去んだく」

権八「ハイくくく、イヤモ番頭さんの極りが良いので、段々荷の出る口が少なくなつたはい」

権八「ハ、ハ、ハ、ハ、これでは出入方も胸の算盤の桁が

むつとはすれど、色にも出さず、  
妙三「オ、権八のすけくと、いかに心安いとて主の蔭口ようないもの、常々実体な栄三郎、なんのそんな所へ行きやらうぞ。噂を聞けばこの間、清水でのやつさもつき、賀の助六殿は親御の勘当との事。ア、よくくくの事であらうが、それに付けては娘のお松、さぞや頼りなからうと、栄三もわしもとつおいつ、夜の目も合はぬ物案じ。大方賀殿の託言せうと、万屋の同行衆へ談合にかな往たのであるぞい」

権八「ハテそれはいらぬ気もせでござりますはい。モ大事の娘御の賀様ぢやが、申し、おかみさんの前ではちと言ひ憎い事ぢやけれど、このまあ広い大坂に、ま一人とないだだはけ。ア、愛しほなげにあの美しいお松つあんを七里けんばい蹴り飛ばし、揚巻といふあのマア古狐に欺され、『今日も揚げ、明日も揚げ』と毎日々々揚げ詰めに、豆腐の揚げでもあの様に買ふてはイヤモとんと堪るものぢやござりやせん。ハ、ハ、ハ、揚句の果てには糞詰まり。あらう事かあるまい事か、

万屋の若旦那ともいはれる身で衒たかりをしたの、イヤ贖金を遣ふたのと、やばな事の有り条、それから起つての久離沙汰きよりさた。それでもまだ仕足らいでとうとう揚巻を引き揚げて、高歩蹴たかぶせりと出かけたはいの、

ハ、ハ、ハ、ハ、

妙三「ヤア、そりやマア本の事かいの」

権八「イヤモ、『本の事かいの、本の事かいの』どころかいな。何が全盛の太夫の事なり、新町の親方から関破りと願ふ故、代官所からも厳しいお手当。どうで追つ付け青細引、オ、怖は、オ、怖は、オ、恐しやのホ、ハ、ハ、ハ、ヤモ話するさへぞつとする」

と、尾鰭おひれを添へしわんざん口、

聞く妙三は氣遣ひさ、老ひの習ひの目に洩るゝ、涙の零しずく繰る数珠の、玉も数添ふばかりなり。

権八「なんと肝が潰れませうがな。オ、その筈、その筈。ヤ、お道理でござります、お道理でござりますはい。私も聞いた時はモ腹が立つて、余り腹が立ち過ぎて悲しいやらまた可笑しいやら、可笑し悲しい、悲

なさもししい心はないはいの。ハテモ智殿がござらざれば舅は親、助六殿の代りに傍にゐて孝行にするが嫁の道。仮令他人が聞かになやこそ、人中ひとなかでそんな事言ひ出して大文字屋の恥、触れ播はふて下さるな」

と、恥しめられて

仏頂面ぶつどうめん、

権八「テモさても堅いはく。エ、マ年寄の片意地と鉄球てつぎゅうのいがんだのは、どうでも焼かにや直らぬはいな。ためになる事言ふが嫌なら、ハーイどうなと、勝手になされませ。ハレヤレヤレ、しゆんだ話で気が詰つた。どりや台所往て、熱爛ねつらんで杯は一引つ掛けやうかと、礼儀を知らぬ野放図者のほはつずもの、つぶやき勝手へ入りにけり。

後には一人母妙三、聾と娘の身の上を案じ重なる憂き思ひ。

西の辻から忙しげに、この家の主栄三郎、心の屈託くつたく顔色かおいろに出さぬは百倍気苦勞の、胸を押さへて立ち帰る。母は見るより、

し可笑しい、可笑し涙がはらく、ハ、ハ、ハ、オ、私としたことが、余り話に身が入つてお前様までを泣かしましたはいな。したがこれ、よう聞きなされませや。そんな大それた科人の助六殿故、親御の勘当はこりや尤もぢやと思はれます。それに付いてお松つあんをアノ万屋の内にべんぐと置いたら、どんな難儀がかゝらうやら知れませぬぞえ。たかが嫌ふて置き去り同然にいられたお松つあん、ハテモ男日照りはあるまいし、ちつとも早う呼び戻して、また外ほかに相応なよい談合だんごうもありそうなもの。マ、よう、思案なされませ」

と、お為ごかしの譏り口、聾の藁わらから焚き付ける硫黄いおうの鼻の先智恵さきぢえは、修羅を燃やさす企みかや。

聡さとし妙三、権八が詞の端々はしはしなんとやら、合点行かずと手を打ち振り、

妙三「オ、権八の何言やるぞいの。たとへ智殿はどうあらうと、一旦嫁入よめらしたれば万屋の娘、あつちから戻らされたら是非もなし。が、難儀が嫌さに取り戻す様

妙三「オ、栄三戻りやつたか。朝早う出て今頃までどこに何して、ひもじかる」

と言ふを

押さへて、

榮三「ア、イエ、昼飯ひるめしは得意先で呼ばれました。

それはそうと母者人、どこへ往ても聾の噂、ひよんな事になりましたはい」

妙三「サイノ、今も今とて権八が智殿の品しなず話はな。聞けば聞く程氣の揉める事ばかり。どうしたらよからうと、そなたの帰りを待ち兼ねました」

榮三「ハアお道理でござります、お道理でござります。したが申し母者人、こゝをよう御合点なされませ。助六が勘当なれば相手のない妹いも、助右衛門殿が戻したうても、何やかやの義理を思ひ遠慮の場合もありそうなもの。そこを汲み取らぬはこつちの不粹ぶすい、なんと妹めを取り戻さうぢやござりますまいか」

と、律儀な常の氣質とは、そぐはぬ詞の先折つて、

妙三「ア、これ栄三、そなたまでがそりや何事。よう物を思ふてみや。たつた一人の子に別れ力ない舅御、ことに近頃はきつい弱り。せめて寝所の上げ下ろし、介抱さすが一家の誼」

栄三「ア、イヤ、そりや悪い御了簡。大金持ちの万屋、一人息子が身を打つ女郎、請け出してもやりたけれど、義理ある中から貰ふた嫁、枷になつてもそうもならず。ところで助六を追ひ出したら、嫁の方から去ぬるは定。そこで太夫を請け出して助六を呼び戻す思案の底、と見た目は違はぬ。また助六は猶以てうるさがる妹、何もその様に親子共、もみない物喰ふ様にして貰はいでも、大事ないちやござりませぬか。ハテモ、十人並みには勝れたお松、取り返してどこへなど」

妙三「これ、栄三、そなたマアおかしき氣を廻す人ぢや。助右衛門殿に限りそんな酷い人ぢやない」

栄三「ソ、それはお前の正直一遍といふもの。この様にもちやつきだすと、常懇ろにした中でも酷い氣の

ます。委細はお目に掛かつて申し上げませう』

と、言ふ内門へ提灯の、

影も心もかき曇る、お松といへど色変る、顔は辛苦に面瘦せて、敷居も高き兄の内、

供の丁稚や腰元も、氣の毒そうにしよげくと、

猫に追はれた忠兵衛は、栄三が返事お松にも挨拶そく、供の者、皆打ち連れて帰りける。

妹はしをく、兄の傍、物も得言はず袷に顔、

栄三は奥口見廻して、

栄三「ア、この間は定めていかい氣扱ひ。それでか、きつう色も悪い」

お松「推量して下さんせ。世界に運の悪い者は私ばつかりの様に思はれて、手も力もござんせぬ」

栄三「オ、そうあらう、さうあらう。何かの様子聞いた故今夜は是非とも、おれが迎ひに行くところ。よう戻つてたもつたのう」

お松「なんのよう帰りましよ。内にも寝ぬ殿御でも大事にするが女房の役と、心一杯氣を付けても、氣に入

出るが世界の有様。ナ申し、どうであらうとお松はこつちへ」

妙三「ア、栄三、聞きとむない、まだ言やるかいの。助六殿は勘当でもお松と夫婦の縁は切れぬ。女房の方から隙取るとは、そりや大法に背いた事。それまでもない、二人三人男を持たして可愛い娘を疵物には、モこの母が得すまい。エ、マ阿呆らしい」

といつにない、母の腹立ちぐはつたひし、道具に当たり中の間の襖

引き開け入りにけり、

すでに日も暮れ飯炊が、灯す勝手の八方に十方失ふ氣は暗闇、心にもないわんさんを、言ふも栄三が算盤の桁を外れて門口の、大戸下ろせど落ち付かぬ胸の算用とつおいつ、思案の中戸に人音して。

万屋の手代忠兵衛、上り口に手を支へ、

忠兵衛「お袋様、栄三様へも助右衛門申します。『ちと御相談の事に付き追つ付けそれへ。マア嫁を先へ遣はし

らぬは私が誤り。つひにく、小優しい氣の落ち着いた事もない夫婦仲でも、『万屋の内から葬礼しられい』

と、かゝさんの教えを守り辛抱した甲斐もない。夫の勘当その上に関破りのお尋ね者と、聞いて今朝から湯水さへ喉を通らぬ癩の痛み。舅御は最前も、『ア、よいつに勘当した、関破りせうが首の座へ直らうが、親へ難儀は掛からぬ。祝ひ事に酒一つ』と立派には仰れど、目には一杯涙を持ち、私が爛して注ぐ酒をお受けなされた盃も、震ふて溢れる酒よりも、膝を濡らすは舅と嫁の、涙は堪忍せぬものと、噎せ返りたる口説き泣き。

栄三も共に目を擦り、

栄三「現在の兄が氣にさへ感じ入つたそなたの貞節。助右衛門殿の心根を推量した故、今も今とて母者人に思ひもせぬ廻り根性。ところへかう戻つて来たはおれが存念の届いた証。これ、我が身のその直ぐな心を見据えておれが一つの無心がある。が、なんと聞いてくれる氣か」

お松「才、改つた事仰ります。兄妹仲になんの遠慮、どんな事でも」

栄三「聞いてたもるか」

お松「アイ」

栄三「そしたら新町へ、新町へ往て勤めをしてたも」

お松「ヒエ、」

栄三「オ、びつくりする筈ぢや。二張の弓は引かぬと女子の道を立てるそち、なんと勤めがしられうぞ。がそこを破つて勤めをするが、やつぱり夫助六へ心中」

お松「ムウ、勤めするを心中とはえ」

栄三「さればいの。勘当しられて狼狽え廻るは、しよとがないと諦めても済ませど、揚巻を連れて退いた助六、関破りといへば科人。どの様な憂き目に逢はうやら、その科を助けうと思へば、揚巻が身の代を親方へ立てさへすれば、お上体は願ひ下ろして何のふしなう事は治まる、と言ふてその身の代が端た金で出来るこつちやない。知りやる通り、近年は不手廻しなこちの身上、なか／＼才覚及びもない事。往かぬからの思

の口よりこの栄三が胸がどうも済み難い。こゝのこゝろを弁へて、廊へ往てたも、勤めてたも。昨日今日まで万屋の花嫁御と人に人を連れた身が、日傘を差し掛け人中の道中、そなたの面目ないよりもおれが外聞不甲斐なき。人に指差し笑はれるも、義理と金とに恥を捨つる心を思ひ遣つてたも」

と、母の手前を憚る涙、声をも立てず男泣き、

お松も涙の顔振り上げ、

お松「もう／＼／＼なんにも申しませぬ、よう勤めさして下さんす、兄さん嬉しい、忝い。ア、これを思へば清水で夫の勘当赦り次第、『退かう』と言ふて揚巻殿、証拠に貰ふたコレこの櫛。助六さんも手を切る証と守り袋の七枚起請。今更義理の言ひ過ごし、取り返されぬと合点して、大坂離れ添ふ様に連れて欠落さしやんしても、世間も狭く、佇みの成らぬ時には、突き詰めた日頃の律義一筋に、もしひよんな心でも出よかと思や、わしや身も世もあられぬ。嬉しや勘当赦りたらば心置きない女夫ぢやと楽しんだのも夢

ひ付き、昨日揚巻が親方扇屋に直談して、義理合ひの内証万端打ち明けて、『もう近頃無理な事なれど、妹のお松を代りに取つて申し下ろして下され』と

段々と嘆いたれば、ハア了簡のよい親方、『よし、揚巻が戻つてももう疵の付いた太夫、外に身請けの客も変替、廊の勤めは元よりさ／＼れず、仕替えに出しても虫付きと思ふ様にはならぬ。器量よしと聞き及んだ万屋の嫁御、ハテ得心尽くで勤める気なら、ヤこりや一番仕て見ものぢや、聞き分けた』と約束は固めて置いた。が、コレ、おかしいところを力む兄と思はうが、こゝをよう聞いてたも。先の万屋助右衛門殿はそなたやおれが実の伯父貴。その後継に手代を引き上げ今の助右衛門殿、家の甥と懇ろにぎぢかはするこちの身代、肩を入れて今日まで世話して下さる親切さ。その息子の助六が難儀を余所に見てゐたら、ア、血を分けた従弟なら黙つてもゐまい。表向きは伯父の従弟のといふても、血筋でない離れ際、胴欲な捨て、置くとサ、思ふ様な助右衛門殿ではなけれども、世間

現。とても私は世の中の女子の数にも入られぬ身

が、夫のためにする勤め。恥しいとも無念なとも口惜しいとも思はぬが、舅御やか／＼さんやお前の心を思ひ遣り、それが悲しい、悲しい」

と、口説き嘆くぞいぢらしき。

不憫と思へど気を取り直し、

栄三「母者人の手前は一寸遁れ、世間へ顔が出されぬ。そなたは京の懇ろ中へ駆け落ちした分にせう。

サ、早う新町へ連れて往きたい」

お松「そんなら私や書置を」

妙三「イヤ、もうそれには及ばぬ事、栄三でかした、お松よう新町へ往てたもるの」

栄三「母者人、お前先にからの様子を」

妙三「オ、暖簾の内に立ち聞きして、泣いてはつかりゐたはいの。四百四病の病ひより貧程術ないものはない。貞女は両夫に見えずと、女大学傍に置いて朝夕教えた母親が、夜毎々々に越路の客や筑紫の人に添ひ寝する勤めを、『ようする、でかした』と、誉めるは



栄三「とはまたどうして」

助右「オ、どうしてとは、そつちの胸に覚えがあらう。今朝からぶら／＼こちの内を見入れて門先をあちこちとするは、道具会で近付きになった新町の扇屋。ハテ合点が行かぬと、隣りの店の片蔭へ呼び込んで追ひ駆け喰はして様子を問へば、『揚巻が代りに妹を売つて助六が関破りの科を助けてやりたい、と涙を流して栄三殿が段々の頼み故、嫁御の器量を見に来た』と、一部始終を委しい話。従弟といふは名ばかりで根は他人の俵めを、それ程にまでに思ふて下さる親切。なんと嫁が売らされう、なんと嫁が売らされうぞいの。揚巻が身請けするにこそ、血筋は引かねど姪と名の付くお松が身請け、千両万両投げ出しても、草葉の蔭の先お右衛門殿がよもや腹も立てられまいと、買ふて取つたその証文。真実誓文、こりや俵めが可愛さばかりぢやない、こなた衆親子三人の志があんまりあまり忝さ。気休めにとあらぬ去り状。満更悪企みはせぬ助六め、追つ付け身の明りも立ち、首尾よう内へ戻つた

押し開け入りにける。

往来も暫し途絶えして、四方に人音幽かなる折を見合はす格子先、

伝九「へ妙法蓮華経、申すも愚かや祖師日蓮大菩薩、竜の口にては太刀の下に直り給ひ、またある時は佐渡が島に流され給ひ、難行苦行なされしも、かの一物をせしめんための御誓願なり。南無妙」

りんはなけれど冴え渡る、法華の題号

合図と見え、内より潜りそつと開け、

権八「伝九郎、伝九郎来たか」

伝九「権八、首尾は」

権八「へ、まぶぢや、まぶぢや。世話なしに娘は戻つた。『助六が来ている』と一杯喰はしてこゝへ出そ。我れも身振りを助六で、ハテ物さへ言はねば知れぬが暗がりぢやい。喰はへて退いて腹存分楽しんだ胴穀は約束の通り京へ売り、その金は権八に」

伝九「こりや、大きな声すなやい。そここのところに抜かりはない。が、嫌な事は金七がこの中の晩から行方が

時、また改めて嫁入りの式金はその去り状。どれ程義理を知らぬ俵めでも、この様子を聞いたならば心も折れて、夫婦仲、睦じうなれそなもの。なんとそうではあるまいか」

と、色も香もある梅干親仁、辛う見えても粹なりけり。親子三人手を合はし、忝け涙一時に『ワツ』と泣く声、耳に手を当て、

助右「アレまた泣かしやる、また泣かしやるはいの。もう／＼この間は涙にほつと飽き果てた。どりや、去にませう」

と門の口、とつかは出るもゆつくりと、泣きに去ぬると哀れなり。

母親は氣を付けて、

栄三「これはしたり、暗からう。それ栄三、提灯を」

と、手早に灯す小提灯、追つ付け行けば

母親も、娘も少し落ち着いた、胸を擦つて奥の間へ襖、

知れぬ。ひよつと隆助か助六に捕まへられたら大きなぼく。おれも大坂に体は置かれぬ」

権八「オ、そりやうつかりとはしてあられぬ」

伝九「がマア、なんであらうと娘はおこそ。油断せぬ様駒寄の蔭に隠れて待つてゐい。見付けられな」と手先で知らせ、内へそろ／＼隔ての襖。

差し覗いて声細め、

権八「お松つあん、お松つあん、ちよ／＼／＼ちよつと、ちよつと」

と、小手招き

何心なく出て来るを、

傍に連れて小声になり、

権八「これ、来てぢやぞえ、来てぢやぞえ」

お松「ヤア、来てぢやとは誰がいの」

権八「サア、今表から『権八、権八』と呼んだは誰、と出て見たれば、これ助六さんぢやはいな」

お松「ヤアそれは」

権八「ハテ声が高い、声が高い、高い／＼、高い／＼」

く、高いはいな。ア、おいとしぼや。身すぼらしい  
紙子かけ、涙で継手は離れく。畜生の様な揚巻め、  
おれが乾皮になつたを見捨て、蒔いて仕舞ふて  
後白波。モそれからは独り法師。犬に、ホイ、ホイ、  
ホイくくく、追はれて一夜さは、稲荷の森で寝たは  
いの。オ、悲しがるく、悲しなうて何とせうぞい  
の。その真実な女房を嫌ふた罰でひだるい目、アノ、  
急に、なんなりと喰はしてくれ。がマアお松にちよつ  
と逢ひたい、逢はしたもとおろくご、ホイ、ホ  
イ、ホイ、ホイ、ホイくくく、声、お馴染みなり。  
裕福に育つたお方が乱れの様な形を見て、熱い涙が、  
コレマ涙が」

と、言ひつゝ顔に袖屏風、唾の涙で取り掛くれば、

お松は真と、

お松「そりやマアどこに、早う逢ひたい呼びまして」  
権

ハ「イヤく、イヤく、まだ家内が寝もせぬ内、  
飯炊や丁稚めに見付けられてはためにならぬ。コレ、  
駒寄の蔭に屈んでぢや程に、ちよつと逢ふて連れてお

這入り。わしやその間に内の首尾、灯も暗うして置  
きます」

と、言ひ様八方するくくく、下ろして灯蓋庭の隅、  
隠せば辺り薄暗がり、

お松が思ひ山鳥の尾ろの鏡の夫慕ふ、身はわなくと潜  
り戸を漸う開けて軒の下、

お松「助六さん、助六さん、どこにぢやいな。ア、いと  
しや、現在女房の親の内へよう這入りもせず、隠れ屈  
んでこの形は何事ぢやいな。その憂き苦勞を思ひ遣つ  
て別れた時から泣き続け、ちつとは可愛いと思ふてな  
ら私がする様に、マアこちへ」

と、手に

手を取れば、

荒くれし手先に

びつくり、

お松「ヤ、誰ぢや」

先「オ、おれぢやはいの」  
と抱き付く顔、

お松「ヤ、伝九郎め、あれえ、あれえ」

と言ふ声に

驚き駆け出る母親を、

出さじと権八綿の楯

お松を引つ立て駆け行く伝九郎、

戻りかゝつた栄三郎、出合ひ頭に、

栄三「ヤア、伝九郎め、逢ひたかつた」

と道塞がれ、

『南無三宝』とお松を捨て、ひらりと抜き打ち

かひ潜り、抜き身手繰つて山雀投げ、

権八「しくぢつたか」

と加勢の権八、

帯に取り付く妙三が、気転は下りたる八方の鎗に結び目  
親子して、体をしづと引き上ぐれば、

宙にぶら〜

権八「のう悲しや、こりや目が舞ふ」

と七転八倒、

門には二人が揉み合ひ捻ぢ合ひ、

内を氣遣ふ栄三郎、

隙間に遁れ、逃げ出す伝九郎、

栄三「ヤア詮義のある奴、遁さじ」

と後を慕ふて、追つ掛くる

(2026. 2. 19)